



日 口 交 流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



茶道体験2024年(1)

安部 花子

1月21日、田町リーブラでの茶道講習会に参加しました安部と申します。2022年の4月以来、実にほぼ2年ぶり、3回目の参加です。前回の反省を生かし、長襦袢にきちんと衿芯を入れ、こんな寒い日のお茶会にピッタリな、小雪が舞い散る柄の着物をセレクト。はるか昔、着るためではなく絵のスケッチ用に上野の古着屋さんで買って

おいた、ポリエステル100%の500円の着物が日の目を見ました。お茶会自体が久しぶりだったため着付けができるか不安でしたが、意外にも10分弱で完成させることができ、まだまだ稚拙ではあるものの、昔の自分からすると考えられないような進歩にひとり嬉しくなりました。

今回も、千葉副会長のこだわりが随所に光る、お菓子、茶道具、しつらえ。中でも印象的だったのは、2024年の始まりとともに日本列島を襲った地震や飛行機事故を受け、皆様が「無病息災」に過ごすことができますようにと願いをこめた、6つのヒョウタン(=むびょうをもじったモチーフ) 柄の棗という抹茶を入れておく容器。「ヒョウタン」をロシア語で表現することに通訳



の方が少し困った様子でしたが、メッセージの解説が終わったとたん、ほうぼうからロシア人参加者の「スパシーバ! (ありがとう!)」の歓声が上がりました。

お茶会の帰り際、3年の任期を全うしこの2月にロシアに帰国される女性参加者の方とお話をする機会がありました。その方は

関東のみならず関西地方や東北地方などさまざまな場所に旅行に出かけていて、各地の観光地の写真を嬉しそうに見せてくださるほど、日本文化に関心を持っていらっしゃる方でした。ロシア語が話せる日本人参加者の方に後から教えてもらったのですが、見様見真似で和菓子を食べたりしたことはあったものの、こうやってロシア語で日本の伝統文化を教えてくれるのはとても嬉しいし、若い世代に伝統文化を伝えていくことはとても良いことだ、とたいそう喜んでおられたそうです。その話を聞いて、憧れのロシアに初めて旅行したときのことを思い出しました。現地のロシア人になりきってバーニャ(サウナ)に入り、見様見真似で体を枝葉の束でたたいてみたり、マースレニツァ(冬送りのイベント)の時期に春を祝ってブリヌイ(クレープ)を食べてみたり…。憧れの文化へ何とか触れてみたい!と試みる気持ちは、万国共通なのだなと思いました。

ちなみに今回はあまり体験できませんでしたが、水屋における裏方の役割もとても興味深かったです。美味しいお茶を点てるためにまずお茶碗をお湯で温めることや、茶筌やお茶碗を扱う際のポイントなど…次回はぜひ、お運びだけではなく裏方もやってみたいなと思いました。日本人でも興味を惹かれる裏方役、もしかしたら、ロシア人希望者を募ってお茶会の裏方体験をしてみるという企画も面白いかもしれません。ロシアに帰国後、ふと日本赴任時代を思い出したときに、しまっていた茶筌とお茶碗を引っ張り出し、抹茶を点て、味わいながら思い出に浸る——参加者の大切な思い出の一部となる今回のようなイベントに、今後も携わっていただけたらとしみじみ思うお茶会でした。

お知らせ

●NPO日口交流協会第24回(通算60回)通常総会

日時: 2024年3月30日(土) 10:00~10:40

場所: 新橋生涯学習センター

*会員の皆様におきましては、ご参加くださいますよう。また、ご出欠のご連絡を3月15日までに事務局へご返信いただきますようお願いいたします。また、ご欠席の場合は書面表決又は委任届を必ずお送りください。

*総会終了後、アニメ動画「幕末のスパシーボ」について、その後、懇親会も開催いたします。

●マースレニツァ祭

日時: 2024年3月3日(日) 13:00~15:00

会場: 田町「リーブラ」1階ホール

参加費: 日本人1,000円、外国人500円

*スラブのお祭りをお祝いしましょう。民族楽器、歌や踊り、寸劇など一緒に楽しみます。バシキール、ヤクーツク、ウズベキスタンの音楽など。ブリヌイもご用意します。

●能鑑賞

日時: 2024年5月5日(日) 13:30~

仕舞: 邯鄲、能: 定家、狂言: 素袍落ほか

●ロシア語教室生徒募集中!

初級、中級、上級クラス、プライベートクラスを経験豊富なロシア人教師が担当いたします。オンラインレッスンもあり見学もできますので、どうぞ事務局までご連絡ください。

*お問い合わせは事務局までお願いします。

Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。亀田慶一郎氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org



大相撲一月場所観戦

小川 久美子

1月21日、人生初の相撲観戦をしました。以前から、一度は生で見た方がよいと家族に勧められていましたが、機会がありませんでした。そのため、協会から連絡をいただいた時は、二つ返事で参加させていただくことにいたしました。

凜としたフォームの国技館の建物中に入ると、観客とお茶屋などの関係者が雑踏としてホールにおり、掻き分けながら明るい場内の2階席に陣取ると、つり屋根が美しく、飲食したり、掛け声をかけたり、座敷で足を伸ばしたり、思い思いに相撲を楽しむ観客の様子が一望できました。騒然とした自由な雰囲気、いかにも日本的だなと感じました。

お料理教室の反省もあって、今回は簡単に相撲の歴史なども勉強して臨んだのですが、残念ながら席が遠く、ロシアの方々に係る機会はありませんでしたが、70名余りが参加されたと伺いました。2階席は出方さんの出入りもなく、圧倒的な数の外国人が観戦していました。私たちの後ろの席からは、陽気な英語の応援が飛び交い、勝負の予想をしたり、懸賞旗の数を数えたり、パーティさながらのに

ぎやかさでした。通路を隔てて座るロシアの皆さんは、比較的落ち着いて観戦されていましたが、中には力士の名入りの布を掲げて日本風に声援をかける方々もいて、相撲に慣れ親しんでいる姿を見ることができました。力士同士がぶつかり合う音は遠く、表情を見ることはできませんが、土俵と土俵廻りが上から見下ろせるという点では、観戦しやすい場所でした。

ひとつひとつの取り組みは、あっという間に終わり、中には思わぬ展開になるものもあるため目が離せません。伸びやかな呼出の音が騒めきの中でかすかに聞こえ、場内アナウンスがロシア出身の狼雅を紹介しました。もちろん、皆さんとても喜んでいました。狼雅が寄り倒して白星を挙げたときは大盛り上がりで、見ている私たちも思わず嬉しくなりました。

取り組みが終わると、皆さん速やかに退場され、協会の恒例行事になっているためか、大変慣れた様子でした。

恥ずかしながら、相撲観戦に初めて行った私のほうは、古の日本文化に接した感動の余韻に浸っていました。

「露国軍人の碑」：日本海海戦(1905年5月)後の日口の物語

倉田 有佳

新年早々、「露国軍人の碑」を見るために弘前に立ち寄った。1905年7月28日付『東奥日報』によると、この「露国軍人」は同年7月22日、下北郡佐井村大字長浜字腰掛岩海岸に遺体で漂着した。漁業中の男性が発見し、大間分署へ急報した。身長は5尺7寸余り、年齢は40歳くらい、黒羅紗の軍服には金モールの袖章と肩章の記章、身体には浮き袋13個をまとい、背には白色の蛇の目形の浮き輪を背負っていた。死体と被服には一面海草と貝殻が付着しており、遺体の損傷はかなりひどかった。遺体は大間分署から佐井村の村長に引渡された。

同年9月に村の共同墓地へ仮埋葬され、1908年6月15日に弘前陸軍墓地に改葬された（「露国軍人の碑」の碑文より）。「碑」は改葬の際に建てられたようである。この「碑」が青森県弘前市の長勝寺の境内裏手に現存することは、澤田和彦埼玉大学名誉教授から数年前にご教示いただいた。

念願の「碑」と対面するため、弘前駅からバスで禅林街に向かい、並木道の一番奥にある長勝寺（曹洞宗）へと急いだ。暖冬のため地面の雪は数センチ程度だが、400年以上の歴史を有する寺の広い境内を見渡しても見当がつかない。失礼を承知の上で教えを乞うと、ご住職の奥様が案内くださった。我満四五吉氏が『つわものの跡探訪 元幕僚書記』（1989年、私家刷（弘前市立図書館蔵））で紹介していたとおり、中央に赤十字のような十字が深く彫られた四角い石が、「陸軍軍人合葬の墓」の右手奥の隅にちょこんと立っていた。「碑」は陽光を受け、雪を頂いた岩木山が背後に見えた【写真】。

長勝寺の須藤住職に「碑」の写真掲載許可を願い出ると、即座に快諾くださった。住職からいただいた「弘前忠霊

塔・陸軍墓地 参拝・拝観のしおり」（弘前忠霊塔を守る会作成）には、1896年に第8師団が原ケ平に創設した陸軍墓地が、1939年に長勝寺北側に合葬墓として移設された経緯や、「碑」の来歴などが触れられていた。

日本海海戦でのロシア側の死者は約5千人。日本海沿岸にも遺体は漂着した。秋田羽後舟川港の浜辺では、津軽海峡に面した佐井よりも少し遅く1905年8月7日に発見されている。検視の結果、死後30-40日は経過、黒羅紗の軍服からロシア人の海軍将校と推測された。黒服の一部を残し、遺体は町役場で仮埋葬された。岸に漂着せず、沖合に浮流している死体も2-3あったようである（『正教新報』第594号13頁）。

2020年に公開されたドキュメンタリー映画『Любовь, покорившая Море（邦題：海を超える愛）』（口日の懸け橋「花道」プロジェクト、ウラジオストック）は、対馬海峡に近い島根県隠岐島の二つの村に作られた墓とそれらの墓地を守る地元の方々を取り上げている。関係者の父親あるいはご自身がシベリア抑留者だったという点が印象的だ。

日露戦争開戦から120年。戦闘後の「物語」に改めて目を向けたい。（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）





1月14日、日本の家庭料理講習会

熊倉 広乃



1月14日、田町で開催された在日ロシア大使館ご夫人方とロシア通商代表部ご夫人方向けの日本家庭料理講座に、千葉副会長のお誘いで何年ぶりかに参加しました。

先生は小野田正子先生。助手さんは池永静子さん。男性が黒一点でおひとりが参加。先生は的確に、簡潔に教えてくださったので2時間半が余るほどテキパキと御婦人方は料理を作られていました。

この日のメニューは、袱紗包寿司、鳥手羽と白菜のトロトロ煮、小松菜と竹輪の胡麻和えでした。特に薄焼き卵にはブリヌイ（ロシアのパンケーキ）を作るテクニックがすでにおありだったせいか、皆様上手に仕上げていました。ミツバの結び方も芸術的で、見事に綺麗にまとめられていらっしゃいました。驚いたことに、ちくわやごま油をご存知でない方が多く、その新しさに興味津々でした。ちくわは安く、魚が原料とのことで気に入られた方が多かったです。ごま油使用に関しても多く



方が未経験だったようで、その風味に感動していました。自分の知識や経験を通じて、異文化の食材に触れ、喜びや驚きを共有することができ、これが国際交流の素晴らしい一環だと感じました。私は簡単な通訳をすることにもなり、久しぶりにロシア語を話すことになりました。ロシア語の響きとロシア人の心の美しさを再確認致しました。今回の経験を通じて、通訳のスキルを向上させ、よりわかりやすく伝えるためにさらに学ばなければと思いました。

この日のイベントを通じて、20年以上前にモスクワで慈善事業に従事していた頃を思い出しました。当時はG財団の一環として、マリアのチルドレンという芸術センターで、孤児の子どもたちに生け花と日本の家庭料理を教えていました。

その経験が今回の講座で蘇り、食文化が民族や国境を超えて、国際的な友情を育みながら楽しむことができる貴重な文化であることを再確認しました。このような交流の場は、言葉や文化の違いを乗り越え、食卓を通じて心をつなげる素晴らしい機会でした。日露間の国際交流を深め、異なる文化を尊重しながら楽しむことができ、ますます広がる友情に心から感謝しています。

ロシアの秘境 カルムイク

浜野 道博

ボルガ河がカスピ海にそそぐ下流域にロシア連邦カルムイク共和国（カルムイク）がある。日本からここを訪れる人たちが最近では珍しくなくなり、秘境の誉はアルタイの辺境トゥバ共和国に持っていかれそうである。いずれもモンゴル文化圏にある民族であるのも偶然ではなさそうだ。

カルムイクの首都エリスタの中心にチベット仏教の巨大な寺院があり、敬虔な仏教徒が多数参拝している。ヨーロッパのなかの孤島のような。堂内でダライラマ14世の写真を発見し、こんなところにまで中国・チベット問題が影を落としているのかと驚いた。

カルムイクは平原の国で、5月になると黄色いチューリップが咲き乱れる。そして、このころカルムイクでは「チューリップ祭」が毎年開かれるが、カルムイクのチューリップは野生種のため天候不順の年にはほとんど開花しなかったり満開の時期が大幅にずれたりで、祭といってもあまりあてにならない。ユーラシア中央部原生ともいわれるチューリップはこのあたりでも背丈は10cmそこそこよく見ないとチューリップだと気が付かない。しかし、小さいがちゃんと卵型の花弁がついている。そういえばキルギスやカザフの草原も5月になると群生する野生のチューリップにおおわれるが、背丈も色も同じである。ユーラシアの草原がつながっている実感がある。

このチューリップの黄色い絨毯を横目にボルガ河河口のアストラハンからエリスタを目指して真西に300km車で

移動したが、ほとんどまっすぐの1本道が草原を切り分け、ときおり羊や馬、牛の放牧に出くわした。カウボーイは馬に乗るものだと思いついてみると、カルムイクでは小型の四駆で家畜をおついで。どちらにしても農業には全く向かない痩せた土壌である。

エリスタまであと三分の一の道のりというところで近くのヤシクリ集落の中等学校に招待された。同校の高校生たちがカルムイク民族の歴史を紹介し、伝統的な驚の踊りを披露してくれた。旧ソ連圏ではどの民族舞踊といっても衣装が違うだけのことが多いが、カルムイクの驚の踊りは実に素朴な風情で、貴重な文化遺産を見せてもらった。生まれて初めて生きた日本人を見たという生徒が大勢いたが、こちらも初めて生きたカルムイク人を目にした。そもそもカルムイクはモンゴル人につながる民族なので我々が似た者同士と分かっただけでも楽しかった。

1625年モンゴル西部のジュンガル平原に住むトルグート族が内紛を嫌いその五万家族がはるか西方に逃れ、ボルガ川沿岸に定着したのが1630年。これが今のカルムイク人の祖先と言われる。トルグートはまたたく間にボルガ川下流域からコーカサス北麓を支配して強大な勢力となり、アユキ汗の時代（1714年）にははるばる清朝の使節*を迎えている。

*「異域録」トゥリシェン（平凡社東洋文庫）解題に使節と紀行録をめぐる経緯が詳しい。（この項続く）

「ろしあ亭」

畔上 明

東京神田の「本の街」神保町で親しまれてきた「ろしあ亭」が、昨年10月末をもって閉店したことで、残念な思いでいらっしやる方もおられることでしょう。

1951年生まれの北市泰生さんは芦別の高校を卒業後1970年代初頭の学生運動の影響で日大法学部を中退。その時から新宿のロシア料理店「スガリー」で働くこととなり腕を磨いて、1995年7月に「岩波ホール」近くのすずらん通りに「ろしあ亭」を開いたのでした。

映画大国作品とは異なる隠れた秀作の上映に努めた「岩波ホール」の顧客はもとより、昭和の名画をテーマごとに上映する「神保町シアター」での鑑賞帰り、或いは界隈の楽器店へ、山愛好家がスポーツ店に寄ったついでに、また古書店を巡り歩いた先にと「ろしあ亭」の馴染み客は広がっていったのでした。

看板メニューの中の赤いボルシチと白いビーフストロガノフが鮮やかな紅白の対をなしていますが、サンクト・ペテルブルクのストロガノフ宮殿内のレストランで味わったビーフストロガノフが、日本の多くの店で見られるようなハヤシライスのような色ではなく、ストロガノフ伯爵から伝わる本場では白いソースがかかっていたこともあり、「ろしあ亭」のオリジナルを踏襲したであろう調理にその心意気を感じたものです。

4年前からのコロナ禍で多くの飲食店の経営が苦しい思いをしていた数年を「ろしあ亭」も歯を食いしばる思いで乗り越えたところに、2年前からのロシア軍のウクライナ侵攻、ロシアとの関わりのある仕事は大打撃を受ける中、これも何とか乗り越えつつある矢先のことでした。



市川に再オープンした「ロシア亭」と店長の北市さん

神保町の歴史ある古書店が変化しつつあること、2022年7月に岩波ホールが閉館したこと、そんな状況も「ろしあ亭」が姿を消した要因になっているのかもしれない。

新しい年を迎えて、大学時代にロシア文学を共に専攻

していた旧友から、在住している市川の街にロシア料理店が誕生したのでそこで再会しようとの誘いを受けました。そして訪れたJR総武線市川駅より南に徒歩5分のゆうゆうロード沿いの店が、何と神保町から移転した「ろしあ亭」だったのでした。北市さんの尽力により、僅か1ヶ月の後2023年11月27日に千葉県市川市で営業を再開したということでした。小規模ながらも本格的なロシア料理を味わうことが出来るということで1、2階共に満席状態、予約していた2階席では2年前にウズベキスタンのアンジジャンからやってきたという青年が対応してくれました。高齢の母と神保町で映画を観るたびに「ろしあ亭」を愛用していたことを覚えていて下さった店長北市さんとの再会も嬉しいことでした。

「ろしあ亭」の思い出の一つに、2006年「第一回日露観光交流促進協議会」のご苦労さん会を店全体を借り切って催したことがありました。モスクワでの会議を終えて帰国後、国交省観光課課長が指定した店が「ろしあ亭」、音頭を取って旅行業関係者が集い「継続は力なり」と挨拶をされ、その後の交流拡大に期待をもった、そんな時代だったのでした。



日本語教室

千葉 麻里

一昨年から大使館の日本語教室はクラスが増えて、一層熱心な生徒が増えている。毎週金曜日、午後2時から初級、中級、入門クラスと続き、最後にプライベートクラスがあって終わるのは6時を回ってしまう。

初級クラスは日本が何度目かで、顔なじみであるが継続ができなかった人たちが多く、中級クラスは日本語能力試験にも挑戦して初級は受かった人が多く、すでに漢字交じりの読み物も読んでいます。入門クラスは昨年から新たに増えて、通商代表部からも通っている熱心な生徒さんたちだ。最後のクラスは上級で、通訳のときの日本語を追求している。更に美しい日本語、自然な日本語を目指している。

もちろん、教えた経験のある人なら誰でもわかることだが、4クラス分の教材を作っていくのはなかなか時間も労力もかかる。毎年、少しずつニーズや個性が違うので、同じ教材を使えるとは限らない。内容を少し変えたり、全く新しいものを用意する必要もある。敬語がもう少し少しいたら、問題を変えたり角度を変えたりしてみる。練習問題だけでなく、会話にしたり物語にしたり、手を変え品を変え

繰り返してみる。日本の慣習や伝統などもテーマにして、生活の中で興味を持てる、すぐに使える言葉なども取り入れないと言葉は生きてこない。

とはいえ、生徒さんたちの熱心さに救われることがどれほど多いことか。時間に追われて、教材を十分に練ることができずに授業を迎えることもあるので、申し訳なくなることもある。

休みの日に外で使ってみて通じてうれしかった、とか、駅で聞こえてきた日本語がよくわかった、とか言われると本当に良かったと思う。すぐに実践にできるのは日本に住んでいることのメリットだ。交通機関を使うとき、病院へ行ったとき、買い物する場合など必要な単語や言い回しもできるだけテーマにする。文法的な反復練習ももちろん大切になる。

また、日本の文化にできるだけ触れて、特徴的な言葉の意味も知ってもらうように努めている。しかし、色々な意味で積極的に勉強する姿勢ははっきりと見られるので、むしろ引っぱりながら続けられているような毎日である。

(副会長)